

東郷元帥の五十年忌に想う

仲野 晋

(会員・弥生町江良)

元帥と云つてもその数は東西を通じて極めて多いが、私にとって元帥と云えば東郷平八郎元帥を第一とする。元帥忌が来ると私はいつも元帥を想う。

東郷元帥は昭和九年(一九三四)五月三十日、八十八才の高令にて逝去された。二十九年、日本海々戦に大勝した連合艦隊が、佐世保軍港に凱旋したのも五月三十日であった。

軍人としての元帥はあまりにも有名であるので、少年時代の二、三について紹介しよう。

元帥は弘化四年(一八四七)十二月二十二日鹿兒島市加治屋で生まれた。今から百三十七年前である。幼名を仲五郎と云い、水野流剣道の達人で藩の御納戸奉行をつとめ、海軍思想の普及に心を寄せた父吉左衛門実友と、白梅の君と云われ南国特有の明朗端麗な賢母益子の子と

して生まれた。そして準人式はんとの峻烈な教育をうけて、心身共に鋼鉄の如く鍛え上げられた。

安政二年(一八一九)仲五郎少年が十才の時のことである。ちやうどくら盆会の七月十五日、家業も休みなので一人で近所の田圃の中を歩いて小川の岸辺に出た。見ると沢山の小鮒かなが銀鱗を見せながら川上にのぼって行く。しばらくじっと魚群の動きを見つめていた少年は、何を思ったのか、着物の裾すそをからげて水際に降り立ち、抜く手も見せず小刀にて水中を一撃した。と、矢のようにさかのぼっていた鮒が真二つに切られて浮かび上った。なおも次々に一撃を加えると、水面はたくさん鮒が死屍累々となった。この敏捷な様子を見た人々は舌を巻いて驚いた。

父吉左衛門に黒毛の愛馬がいたが、なかなかのかん馬

で、吉左衛門以外の人には容易になつかなかつた。ある日仲五郎少年はこの馬を怒らせてやろうという気になり、馬屋に行って棒先でいたずらした。すると馬は本性を現わし、前足を上げて少年をけ飛ばし、更に頭にかみついたので、さすがの剛情我慢の少年もこれには驚き、持っていた棒で滅茶苦茶に馬をなぐりつけ、やっと逃れた。普通の子供なら大声に泣き出すであろうが、彼は泣かなかつた。そして誰にも一言も話さなかつた。

翌日、母はいつもの通り仲五郎少年の頭髪を結うてやった。これは東郷家の習慣で、毎朝必ず新しい元結を使って子供達の身なりをきちんとさせた。

母が髪をすくと大きな傷があつたので「これはどうしたの」と驚いた。「内の黒毛にかまれました。」と仲五郎は母に聞かれて始めて昨日の出来事を残らず話した。黙って聞いていた母はこれ位の傷で済んだのを喜びながら「これからお国のために尽さねばならぬ体です。大事にしなければなりません」ときびしく叱りつけ、懇ろに諭した。

この母の諭しをじっと聞いていたが、内心カッとし、「こんなに母上に叱られたのも、黒毛のためだ。一つ仇

を討ってやろう」と再び馬屋に行き、大きな棒で馬を滅多打ちにして、うつぶんを晴らした。

直川史談会

西南之役記念碑を建立

直川史談会（会長山下貞男氏）は明治十年西南の役の激戦地陸地峠に記念碑を建立した。

碑は自然石に「西南之役陸地峠戦闘跡」と刻している。去る三月八日春雨の煙る現地で除幕式を行った。

陸地峠は直川村と宮崎県北川町の境にあり、標高五二五mの地で、明治十年六月十九日から七月中旬まで、陸地峠一帯にわたり、官軍と薩軍との間で一進一退の死闘が繰り返され、双方に多くの死傷者を出した所である。

なお詳細については、次号に山下貞男氏が一文をよせて下さることになっているので、本稿は報告だけにとどめる。